日本医史学雑誌第三十九巻第四号
平成五年十二月二十日　発行　　平成五年四月三日受付

痰の起源（二）

――梁以前の医書にみられる「痰」の検討――

遠藤次郎、中村輝子、八巻英彦、宮本浩和

痰の字が『素問』、『霊枢』、『難経』等の古典にないことから、中国の伝統医学には、本来、痰の概念がなかったといわれている。著者らは中国伝統医学と仏教医学との関わりを研究する過程で、痰が仏教医学から導入された概念の一つであることに気付いた。そこで前報において、漢訳仏典における痰の用例を検討し、この問題を明らかにした。[1]

仏典の漢訳は二世紀頃から始まったといわれるが、[2]仏教医学の影響を受けた医書としてあげられるのは、梁代の陶弘景の『肘後百一方』である。後漢から梁に至るまでの間にも仏教医学の受容は想定されるものの、これについての具体的な研究は少ない。本報では、後漢から梁までの医薬の書物にみられる「痰」の用例を検討するとともに、この結果をもとにして中国における仏教医学の受容の経過を考察したい。

一　『金匱要略』における「淡」と「痰」の用例

張仲景（後漢末～三国時代）の著述といわれる『金匱要略』の痰飲欬嗽病篇が医書の中で最も古い「痰」の記述であるといわれている。[3]しかしながら、『金匱要略』の古い形（張仲景の『傷寒雑病論』の雑病の部分）を残しているといわれて

いる王叔和の『脈経』の引用では「痰」は「淡」になっており、[4] 古くは「痰」は「淡」であったと推定される。したがって、「淡」の用例の初出は張仲景の『傷寒雑病論』（以下、『雑病論』と略称）であるといえよう（ただし、淡味というような場合の「淡」の例を除く）。

（一）飲有四……淡飲、懸飲、溢飲、支飲……、其人素盛今瘦、水走腸間瀝瀝有声、謂之淡飲

ここでの「懸飲」は左右の脇下にぶらさがった飲の病、「溢飲」は体表に溢れ出た飲の病、「支飲」は心下部などにつかえた飲の病の意味である。これらと対比させると、「淡飲」は腸間を流動する飲の病であり、今日一般に理解されているような喀痰による飲の病とはしがたい。このことは、『千金方』や『千金翼方』で「水在腸間、動揺有声」の飲の病を「流飲」としている点からも裏付けられる。[5]

また、痰飲欬嗽病篇には「病淡飲者当以温薬和之」とある。これから、「淡飲」は冷性であることがわかり、『雑病論』にみられる「淡」（「痰」）は「冷性の水の動揺するさま」を意味するとみるべきであろう。「淡」の字は、「淡味」等の例からわかるように、本来は、「あわい」、「うすい」等の意味である。これに対して、淡が水気の意味で用いられるのは、「淡」の字に通用する「澹」の字の「水揺ぐなり」の意味に由来している。

喀痰を意味する「淡」や「痰」は、通常、「胸間の水気」と定義されている。[6]『雑病論』における腸間の水気という定義は特殊な見方であり、注目に値する。

二　『小品方』における「淡」

近年になって『小品方』の古鈔本の残巻が発見され、その原型を窺うことができるようになった。『小品方』の成立年代は劉宋の四四五～四七三年の間と推定されており、[7] 当時の医学を知るのに貴重な資料である。ここでは、「痰」はすべて「淡」と記されている。

（二）茱萸湯、治匈中積冷、心下淡水、煩満注注、不下飲食、心匈応背欲痛方
（三）半夏橘皮湯、治匈中冷淡気満、不欲食飲方
（四）半夏茯苓湯、治匈鬲心腹中淡水冷気、心下洋漕煩、或水鳴、多吐口清水自出……
（五）先服利湯下、便除匈腹中瘀積淡実

引用文（二）、（三）、（四）における「淡」は「冷性の水の動揺するさま」（「注注」、「洋漕」）、または「動揺する冷性の水」を意味している。したがって、ここにおける「淡」は『雑病論』における「淡」と同じ意味であることがわかる。ただし、「淡」の位置は、ここでは胸部や心下部を中心としており、『雑病論』の腸の位置よりも上に移っている。

一方、引用文（五）における「淡」は「瘀」や「積」などと並べられているところから、「淡」が積聚性の病を意味していることがわかる。積聚に注目すると、「淡」を粘性の高い水（喀痰）として把握できる。

以上、『小品方』に記された「淡」に、「冷性の水の動揺するさま」、「動揺する冷性の水」、「粘性の高い水」の意味があることを示した。

三　『抱朴子』ならびに王羲之『足下各如常帖』における「淡」

『小品方』より前の東晋時代の書物である葛洪の『抱朴子』（三〇三～三一七）および王羲之（三〇七～三六五）の『足下各如常帖』（一名『昨還帖』）に「淡」の用例がみられる。両書は医書ではないが、当時の「淡」の用例を知るのに重要な資料である。

（六）凡食過則結積聚、飲過則成淡[8]癖也（『抱朴子』極言）
（七）匈中淡悶干嘔、轉劇、食不可強（『足下各如常帖』[9]）

引用文（六）における「淡」は積聚との関係で述べられており、『小品方』からの引用文（五）の例に類似する。一方、

引用文（七）における「淡」は、熱により粘性を増した粘液を意味している。これは『名医別録』などにみられる「痰熱」（「痰熱結実」[10]）に相当する。（六）と（七）では「淡」はともに積聚性または粘性の水気を意味しており、このような用例が東晋時代にすでにあったことがわかる。ことに（七）の「淡」は喀痰そのものをさすとみなしてもよい例である。

四　『神農本草』ならびに『名医別録』における「淡」と「痰」の用例

陶弘景は『集注本草』を編纂するに際し、『神農本草』を主軸とし、新しい諸家の説を集めた『名医別録』をこれに加えたといわれている。[11]この『神農本草』と『名医別録』は陶弘景以前の「淡」や「痰」の変遷をみるのに格好な資料である。『神農本草』には「痰」の用例はなく、「淡」が二例あるのみである。これに対し、『名医別録』では、「淡」が八例、「痰」が一七例と断然増えている。[12]このことから、「淡」から「痰」へと変遷したこと、また、『名医別録』の時代に「痰」の概念が定着していたことがわかる。

両書の内容をみると、「胸上淡冷」[13]などの冷性の水気病を意味する例がみられ、これは『雑病論』の「淡」の見方に共通している。しかしながら、また一方では、「腹中淡実」[14]、「胸上痰結」[15]、「心下結淡」[16]、「痰熱結実」[10]などの積聚性の「淡」や「痰」の例が大多数を占めているのに気付く。

積聚性の「痰」の例が増えたことと、「淡」の字が「痰」の字に変遷したこととは何らかの因果関係があったとみてよいであろう。すなわち、積聚の程度が高まると、流動性という水の性格が弱まり、「淡」の字ではその内容を包含しきれなくなったため、「痰」の字に変わったと思われる。

五　『肘後百一方』における「痰」の用例

書名にも仏教医学の四百四病との関連が示されているように、陶弘景の『肘後百一方』は仏教医学の影響を受けた医

書として著名である。

（八）胸中膈上痰、厥気上衝所致、名為厥頭痛、吐之即差……吐膽乃止

（九）治胸中多痰、頭痛不欲食及飲酒則瘀阻痰方……取吐

引用文（八）および（九）の「痰」は喀出すべき胸中の痰であるところから、今日我々がいう喀痰に他ならない。東晋時代に萌芽がみられた喀痰の概念が、この書物では確立していることがわかる。

六　「淡」と「澹」

前節までに、『雑病論』の「淡」から『肘後百一方』の「痰」にいたるまでの表記法と意義の変遷を述べた。本節では、「淡」の前身とでもいうべき「澹」（前述したように、「淡」の「水揺ぐなり」という意味は、本来は、「淡」に通用する「澹」の字の意味である）の用例を「淡」と比較しながら検討した。

六―一　『素問』、『霊枢』にみられる「澹」の用例

（一〇）其逆則項痛員員澹澹（『素問』刺熱篇　三二）

（一一）甚則胷脇支満、心中澹澹[17]大動、面赤目黄（『霊枢』経脈　一〇）

（一二）膽病者、善太息、口苦、嘔宿汁、心下澹澹、恐人将捕之、嗌中吟吟然、数唾（『霊枢』邪気蔵府病形　四）

（一三）善嘔、嘔有苦、長太息、心中憺憺[18]、恐人将捕之、邪在膽、逆在胃、膽液泄則口苦……嘔膽（『霊枢』四時　一九）

（一〇）および（一一）の例では、「澹澹」は熱気が動揺するさまを意味しており、（一三）と（一三）では、膽汁の熱が動揺するさまを意味している。今日の辞典には「澹」に膽汁の意味があることを記していないが、（一三）や（一三）の例では明らかに膽汁と「澹」を関連づけている。ただし、ここでの「澹」は膽汁そのものを意味するわけではなく、膽汁が動揺するさまを意味している点に注意しておく必要がある。「澹」が膽汁そのものを意味する例については、次の節で述べる。

次に、引用文（二）と（三）を比較してみたい。両者の内容は類似している。そのなかで、引用文（二）では「数（しばしば）唾す」と記し、引用文（三）では「嘔膽（膽汁を吐く）」と表現している。一般に『素問』、『霊枢』の時代には、「唾」のなかに喀痰の意味も含んでいたといわれているが[19]、膽汁の意味も包含していたことがこの二つの引用文から推定される。

以上の点に留意しながら、『素問』、『霊枢』の「澹」と『雑病論』の「淡」を比較してみたい。それぞれにおいて、「澹」は熱性の水の動揺、「淡」は冷性の水の動揺を意味しているが、この対立的な関係は決して偶然的なものとは思われない。「澹」と「淡」は音義が通じ合う反面、「澹淡」という表現や、古くは『荘子』の「大言炎炎、小言澹澹[20]」という文などのように、対立的に用いられる場合もある。したがって、これらのことを考慮すると、熱水の動揺を意味する「澹」に対応させて、冷水の動揺の意味で「淡」を用いるようになったと考えることができる。

六―二　『小品方』、『効験方』に見られる「澹」の用例

『医心方』が引用する『小品方』ならびに『効験方』（陶弘景撰）に「澹」の用例がみられる。

（四）小品方云、白薇湯、治寒食薬発、匈中澹酢干欧煩方（『医心方』二〇巻　第二九）

（五）（効験方）云、断鬲丸、治胸鬲間有澹水方……当吐青黄汁（『医心方』九巻　第七）

引用文（四）、（五）の「澹」は明らかに澹汁を意味する。『素問』、『霊枢』に見られた「澹」が熱や膽汁の動揺するさまを意味していたのに対して、ここでは「澹」を病の実体として把握していることがわかる。病状を形容する言葉から病の実体を意味する言葉になるという変遷の仕方は、「痰」の場合と同様である。

七　漢訳仏典にみられる「痰」ならびに「膽」との比較

以上において検討してきた医書にみられる「痰」や「澹」の史的変遷を漢訳仏典のそれらと比較検討し、仏教医学と

の関連性を考察したい。

漢訳仏典において、カパ(痰)は、唐以前では「寒」、「冷」、「水」といった属性を表わす言葉で翻訳され、唐以後は「痰」、「痰癊」といった実体を表わす言葉で訳されている。喀痰を唾から独立させる動きは東晋時代にみられ、隋唐時代には確立している。これに対し、医書における「淡(痰)」の用例をみると、初期には、水の動揺するさまを意味し、次に、粘性または積聚性の病という属性の面で把握され、その後、喀痰といった実体で把握されている。東晋時代にその萌芽を認める喀痰の用例は梁の時代には確立している。このように、医書と漢訳仏典における「痰」の記述についての変遷は時代的にほぼ並行しており、このことから、中国の医学に対して仏教医学が直接に影響を与えたことがわかる。

また、別の面にも、中国の医学における「痰」の起源に仏教医学が深く関わった足跡を認めることができる。仏教医学の四大不調説では、膽汁は熱性の喀出物、喀痰は冷性の喀出物として、対立的に捉えられ、ともに重要な位置を占めている。本稿の六―一で議論したように、中国の医書で「痰」の概念の形成過程を調べると、熱性の喀出物としての「澹(膽汁)」を踏まえて、冷性の喀出物を意味する「淡(痰)」の字が作られていることがわかり、ここにも、仏教医学の影響を指摘することができる。

仏教医学は中国における喀痰の概念の確立に直接的な役割を果たしただけでなく、そこでの膽汁の概念の確立にも間接的に関与している。六―一や六―二で述べたように、『素問』、『霊枢』の時代には、澹(膽汁)は属性を表現し、実体としての膽汁は唾や喀痰と余り区別されていない。澹が膽汁という明確な実体を意味するようになった時代は喀痰が確立した頃に近接している。

仏教医学の基をなすインド伝統医学では、はじめから喀痰を実体として把握していた。痰はトリドーシャ(三つの病素)の一つに該当している。これに対して、中国の伝統医学では、属性としての「痰」の見方から実体としての喀痰の見方に至るまでに、ある一定の期間を要した。属性的な見方から実体的な見方へという変化は医学の必然的な発展過程であ

るが、今日に至っても、中国伝統医学では陰陽五行説という属性の哲学を主軸にしている。これらのことを考え合わせるならば、中国における「痰」の概念は中国伝統医学の内的な発展によってではなく、仏教医学という外的な影響により形成されたと考えるのが妥当であろう。

総　括

『素問』、『霊枢』から『肘後百一方』にいたるまでの代表的な医薬の書物における「痰」およびそれに関連した用語の用例を検討し、以下の結論を得た。また、すでに報告した漢訳仏典での痰の用例と比較し、痰の概念が仏教医学に由来するという見方を補完した。

一　『素問』、『霊枢』、『難経』には「痰」や「淡」の用例はなく、喀痰は「唾」や「涎」のなかに含まれている。

二　後漢末から三国時代にかけての『雑病論』（『金匱要略』）に初めて「淡」、「痰」の用例がみられる。これは「冷水の動揺のさま」を意味しており、劉宋時代の『小品方』にもこの例がみられる。

三　東晋時代の『抱朴子』および王羲之『足下各如常帖』にみられる「淡」は粘性、あるいは積聚性を持った水、または喀痰を意味する。

四　『神農本草』には「痰」の用例がなく、「淡」が二例あるのみである。これに対し、『名医別録』では「淡」が八例、「痰」が一七例である。ここでは積聚性の「痰」の例が増え、この時代には「痰」の概念が定着していたことがわかる。また、流動性を意味する「淡」という字では積聚性を表現できないために、「痰」の字を用いるようになった。

五　梁代の『肘後百一方』には喀痰を意味する「痰」の用例がある。

六　『素問』、『霊枢』には「淡（痰）」の前身ともいえる「澹」の用例がみられる。ここでの「澹」は熱や膽汁の動揺するさまを意味している。一方、『小品方』などでは、「澹」は膽汁そのものを意味している。

七　漢訳仏典ではカパ（痰）を翻訳するに際して、初期には「寒」、「冷」、「水」といった病の属性を表わす言葉を用い、後には「痰」という実体を表わす言葉を用いている。医書における「痰」の概念の変遷は漢訳仏典のそれと時代的にほぼ並行しており、仏教医学の直接の影響を認めることができる。

八　熱性の「澹」から冷性の「淡」が形成される過程においても、また、唾や喀痰から膽汁が独立する過程においても、仏教医学の影響を認め得る。

謝辞　王羲之の「淡悶干嘔」の出所は北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究部、小曽戸洋博士の御教示によるものであり、ここに記して謝意を表します。

文献および注

(1) 遠藤次郎、中村輝子、八巻英彦、宮本浩和「痰の起源（一）—漢訳仏典にみられる痰の検討—」日本医史学雑誌、三九巻三号、三三三～三四五頁、一九九三。
(2) 渡辺照宏『仏教のあゆみ』一六六～一六七頁、大法輪閣、東京、昭和五十六年。
(3) 張介賓『景岳全書』五三〇頁、上海科学技術出版社、上海、一九八四。
(4) 影宋版『脈経』、小曽戸洋監修『東洋医学善本叢書』（七）、八六～八七頁、東洋医学研究会、大阪、一九八一。
(5) 宋版『備急千金要方』、『東洋医学善本叢書』（一〇）、六六二頁、オリエント出版社、大阪、一九八九。元版『千金翼方』、『東洋医学善本叢書』（一四）、一六六頁、オリエント出版社、大阪、一九八九。
(6) 慧琳『一切経音義』、『大正新脩大蔵経』（第五四冊）、四五二頁、新文豊出版公司、台北、一九八三。
(7) 北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室『小品方・黄帝内経明堂』七〇～七一頁、北里研究所附属東洋医学総合研究所、東京、一九九二。
(8) 『医心方』第二七巻第三二丁表、新文豊出版公司、台北、一九七六年によった。
(9) 森野繁夫、佐藤利行『王羲之全書翰』、三八七頁、白帝社、東京、一九八七。『淳化閣帖』、一〇〇頁、上海書店出版、上海、一九八四。香川修庵『一本堂行余医言』大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成』（六六）、四一一頁、名著

出版、東京、昭和五十七年には「楊升菴(楊慎、用修)文集云、羲之諸帖、多用古字、初月帖、淡悶干嘔、淡、古淡液之淡、干、古干湿之干、今以淡作痰、干作乾、非也。」とあるが、今日見ることのできる『初月帖』には「淡悶干嘔」の字はない。

(10) 柴胡条下。

(11) 岡西為人『本草概説』四四〜四五頁、創元社、大阪、昭和五十二年。

(12) 尚志鈞重輯、『名医別録』(輯校本)、人民衛生出版社、北京、一九八六。小嶋尚真ら重輯『本草経集注』、南大阪印刷センター、大阪、昭和四十七年。「淡」と「痰」の混同が見られる場合、「淡」の字の方が古い形であるといわれているので、「淡」をとった。

(13) 烏頭条下

(14) 芒硝条下

(15) 旋覆花条下

(16) 薤核条下

(17) 『太素』巻八経脈連環(仁和寺本『黄帝内経太素』、小曽戸洋監修『東洋医学善本叢書』(一)、二八〇頁、東洋医学研究会、大阪、一九八一年)により、「憺憺」を「澹澹」になおした。「憺」は「澹」に通じるので、「憺憺」も熱による動揺するさまを意味する。また、『素問』至真要大論七四に「胷腹満……心澹澹大動……面赤目黄」(『黄帝内経素問』八一頁、人民衛生出版社、北京、一九六二)とある。

(18) (17)からわかるように「心中憺憺」は「心中澹澹」と同じ意味であるので、ここに入れた。

(19) (9)と同書、四〇四〜四〇六頁。

(20) 斉物論。

(遠藤、中村、宮本:東京理科大学薬学部)
(八巻:香栄興業株式会社)

History of the Term "*Tan*" 痰 (Phlegm) (II)

—Studies of the Term "*Tan*" 痰 Found in Medical Books before the *Liang* 梁 Dynasty—

by Jiro ENDO, Teruko NAKAMURA, Hidehiko YAMAKI and Hirokazu MIYAMOTO

The first description of the term "*tan*" 淡 (*tan* 痰)is found in the *Shan Han Za Bing Lun* 傷寒雑病論 published at the end of the later *Han* 後漢 Dynasty. This book refers to this term as a disorder of the cold fluid in the body. The meaning of this term was revised to a viscous fluid as the years went on. The term "*tan*" 痰 from the *Zhou Hou Bai Yi Fang* 肘後百一方 published in the *Liang* 梁 Dynasty has the same sense of phlegm as that found in present works. Our studies showed that changes of the words used for the concept "phlegm" in Chinese medical books coincided with those in Chinese Buddhist literature. We suggested that the concept "phlegm" in Buddhist medicine influenced Chinese traditional medicine.